随筆

深水先生の涙

橋本　和治
はしもと　かずはる

「これは君たち自身のためではないか！なぜ積極的にやろうとしないんだ！」

教室に深水明美先生の大きな声が響いた。そして、先生は目に涙を浮かべ、ロシア語の翻訳文を黒板に書くと、そのまま黙って教室を出て行かれた。

昭和五一年、私が札幌大学ロシア語学科一年生の一月頃のことと記憶している。

この当時先生は、ロシア語作文一を担当されていた。先生の授業は、テキストの日本語を学生各人が前もってロシア語に翻訳し、授業が始まる前に黒板に書き出しておき、それを皆で添削しながら翻訳のポイントを講義するというスタイルであった。

しかし、このときの例文は一年生にはやや手ごわく、クラスの誰も前に行って書きだそうとはしなかった。私もあらかじめ自分なりの翻訳文は作ってあったが、それが正しいかどうか自信がなく、黒板の前に行くことができなかった。

先生は何度も「間違ってもいいから、積極的にだれか書いてごらん。それが勉強なんだから。」とおっしゃられて、消極的な我々学生に翻訳文を書くように促したが、結局誰も書こうとはしなかった。その直後である。前述のように先生の涙を見たのは。

私は、先生に対して申し訳ないと思うと同時に、学生のためを思って涙する教師がいることに驚いた。衝撃を受けたと言ってもよい。実は、私は札幌大学に入学する前にいた学校を中退している。その際の担任の教師の対応が不誠実なものであったため、私は教師不信となっていた。大学に入っても、教師に対する不信感を抱いたままであった。そういう中で

の先生の涙である。心から学生のことを思う先生の涙に、私はこの先生だけは信用しても良いのではないかと思った。その後、先生とのかかわりが深まるにつれ、先生に対する信頼感はますます大きいものになった。ウォッカもよく一緒に飲ませて頂いた。

以来、ゼミでお世話になり、就職でお世話になり、更に結婚式では仲人までお願いした。それから二年足らずで先生はこの世を去られた。振り返ってみれば、先生から直接薫陶を受けた期間よりも、その後の時間の方が遥かに長く、私自身も先生の年齢を超えた。私はロシア語の学生としては、優秀ではなかったが、今もなおロシアに関わる仕事を続けていることができるのは、「先生の涙」のおかげと感謝している。「間違ってもいいから、積極的に…」との先生の声が今も聞こえる気がする。

イラスト © 草野義彦